

# 日商簿記 1 級&全経上級フリーテキスト講座 商会 No.20【連結会計 2】

収録日：平成 27 年 9 月 11 日

## 段階取得に関して

段階取得に係る差益（連結 F / S 上の特別利益）  
段階取得に係る損失（連結 F / S 上の特別損失）

支配獲得時の時価で取得したと考えるのがポイント

### [例題]

次の資料にもとづいて、平成×5 年 3 月 31 日の連結修正仕訳を示しなさい。

### ●資料●

1. P 社の S 社株式の取得状況は次のとおり。

取得日	取得原価	取得比率
平成×4 年 3 月 31 日	¥3,500	10%
平成×5 年 3 月 31 日	¥20,000	50%

2. P 社、S 社ともに決算は 3 月 31 日である。

3. S 社の平成×4 年 3 月 31 日と平成×5 年 3 月 31 日の貸借対照表は次のとおり。

S 社貸借対照表 平成×4 年 3 月 31 日			
諸資産	40,000	諸負債	9,000
		資本金	20,000
		利益剰余金	11,000
40,000		40,000	

S 社貸借対照表 平成×5 年 3 月 31 日			
諸資産	43,000	諸負債	10,000
		資本金	20,000
		利益剰余金	13,000
43,000		43,000	

4. S 社の平成×4 年 3 月 31 日の諸資産の時価は¥41,000、平成×5 年 3 月 31 日の諸資産の時価は¥45,000 である。

5. 平成×5 年 3 月 31 日の P 社が所有する S 社株式の時価は¥24,000 である。

### <超重要>

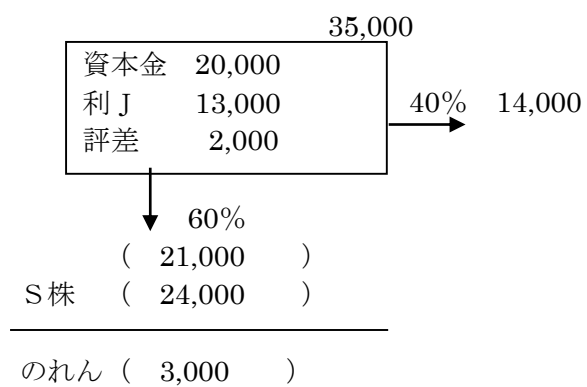
評価差額→段階取得差益（パッチェス法と同じ）→投資と資本の相殺消去

S 社株式 500 / 段階取得に係る差益 500

（子会社 1 社の時は連結 PL ないので利益剰余金をプラスする）

※税効果会計は適用しない（子会社株式の売却予定があればするが、買った段階では売却予定なしと考える）

行って S 社株式の簿価を再計算してから、資本連結仕訳を行う



諸資産 2,000 / 評価差額 2,000

S社株式 500 / 段階取得に係る差益 500

資本金 20,000 / S株 24,000

利益剰余金 13,000 / 非支配株主持分 14,000

評価差額 2,000

のれん 3,000

## 開始仕訳と当期の連結修正仕訳

### [問題]

P社は平成×5年3月31日にS社の発行済株式(S社株式)の80%を¥6,500で取得し、支配した。以下の資料にもとづいて、当期(平成×5年4月1日から平成×6年3月31日)の連結財務諸表を作成するための、(1)連結開始仕訳と(2)連結修正仕訳を示しなさい。

### ●資料●

1. 平成×5年3月31日のS社の貸借対照表は次のとおり。なお、諸資産および諸負債の帳簿価額と時価は一致している。

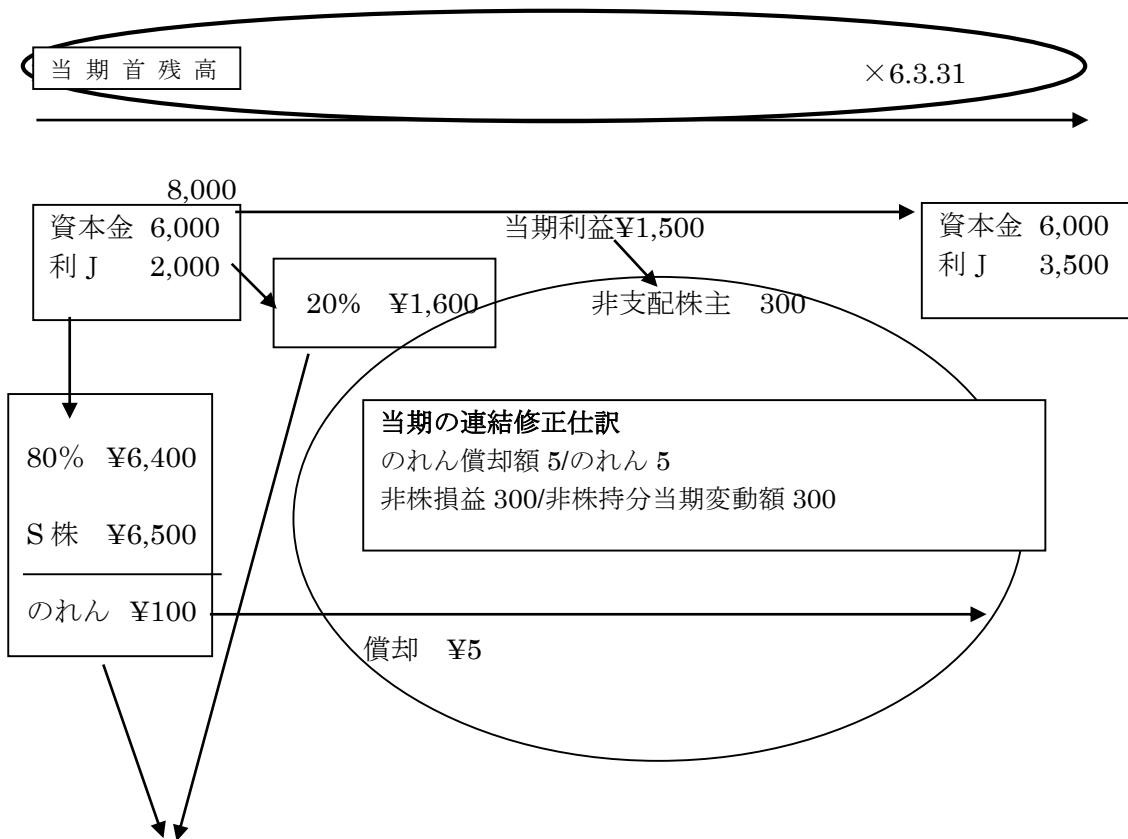
S社貸借対照表			
平成×5年3月31日			
諸資産	13,000	諸負債	5,000
		資本金	6,000
		利益剰余金	2,000
	<u>13,000</u>		<u>13,000</u>

2. P社、S社ともに決算日は3月31日である。
3. のれんは発生年度の翌年から20年間で毎年定額を償却する。
4. 当期にS社は当期純利益¥1,500を計上した。

### 開始仕訳

当期の連結F/S作成のスタートは当期の個別F/Sの合算から  
従って昨年の連結修正仕訳は反映していない

前年度の連結修正仕訳を再度実施するが、前年度のP/L科目の影響は利益剰余金の当期首残高に影響する事に注意しよう



普通に仕訳して、純資産科目にはSS用に当期首残高をつければ良い

<p>&lt;資本連結の開始仕訳&gt;</p>				
資本金	当期首残高	6,000	S 株	6,500
利益剰余金	当期首残高	2,000	非支配株主持分	当期首残高
のれん		100		1,600
<p>&lt;当期の開始仕訳&gt;</p>				
のれん償却額	5 / のれん	5		
非支配株主利益	300 / 非支配株主持分	当期首残高	300	

この内容を効率よく解く方法を次の問題で確認しましょう

連結2年目以降は、さらに当期の連結修正仕訳も開始仕訳に加える  
 但し、PL項目は前年分は繰越利益剰余金として個別F/Sに繰り越されているので、すべて利益剰余金当期首残高という科目で下記のように処理します。

利益剰余金当期首残高 5 / のれん 5  
 利益剰余金当期首残高 300 / 非支配株主持分当期首残高 300

では、2年分の連結開始仕訳の効率よい解き方を行きましょう

①タイムテーブル②支配獲得時科目記載（利 J 空白）③のれん残高④非支配株主持分残高⑤利 J 逆算

**【問題】**

P社は平成×5年3月31日にS社の発行済株式(S社株式)の60%を¥3,300で取得し、支配した。以下の資料にもとづいて、当期(平成×7年4月1日から平成×8年3月31日)の連結財務諸表を作成するための、連結開始仕訳を示しなさい。

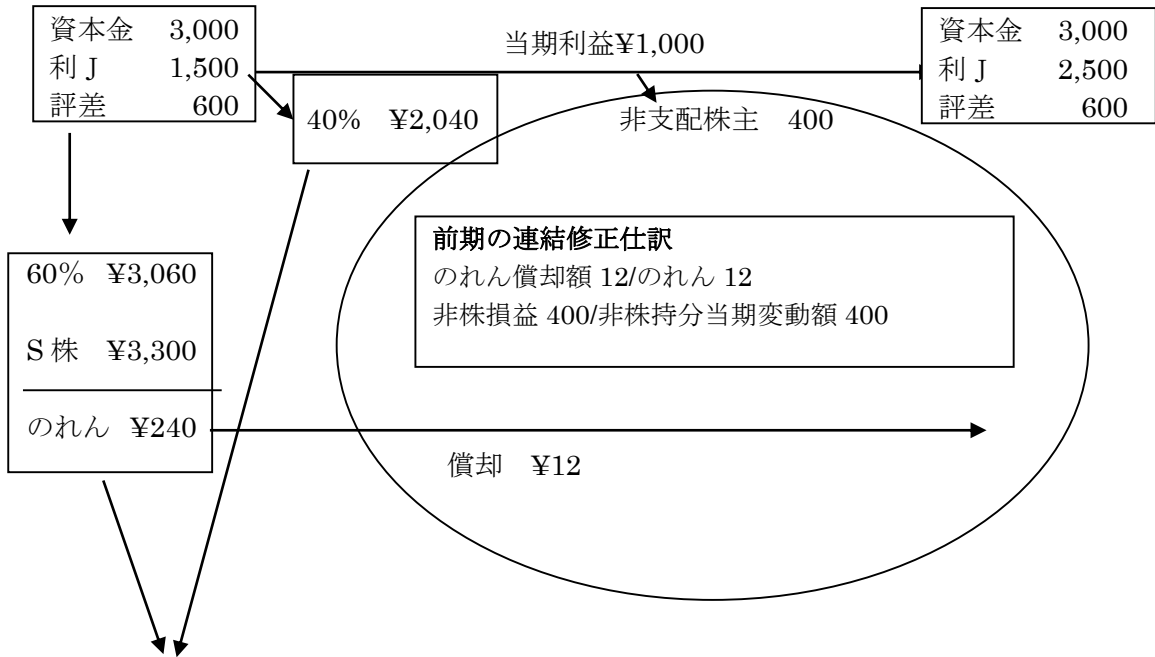
**●資料●**

1. 平成×5年3月31日および、平成×6年3月31日のS社の貸借対照表は次のとおりである。なお、平成×5年3月31日の諸資産の時価は¥7,600であり、諸負債の帳簿価額は時価と一致している。

諸資産	7,000	諸負債	2,500
		資本金	3,000
		利益剰余金	1,500
	<u>7,000</u>		<u>7,000</u>

諸資産	8,000	諸負債	2,500
		資本金	3,000
		利益剰余金	2,500
	<u>8,000</u>		<u>8,000</u>

2. P社、S社ともに決算日は3月31日である。
3. のれんは発生年度の翌年から20年間で毎年定額を償却する。



この2つは2年目の連結時には開始仕訳となる

でも簡単

普通に仕訳して、純資産科目にはSS用に当期首残高をつければ良い

資本金当期首残高	3,000	/	S	株	3,300
利益剰余金当期首残高	1,912		非支配株主持分当期首残高		2,440
評価差額	600				
のれん	228				

では次の問題のために税効果会計もイメージしてみましょう

土地 600 / 評価差額 360  
繰延税金負債 240

評価差額は未実現利益  
実現したら税金取られる  
税金考慮してこそ真の「のれん」

## 税効果会計を含む問題

### [問題]

P社は平成×5年3月31日にS社の発行済株式(S社株式)の80%を¥3,084で取得し、支配した。以下の資料にもとづいて、当期(平成×6年4月1日から平成×7年3月31日)の連結財務諸表を作成しなさい。

### ●資料●

- 平成×5年3月31日および、平成×6年3月31日のS社の貸借対照表は次のとおりである。なお、平成×5年3月31日の土地の時価は¥800であり、その他の諸資産、および諸負債の帳簿価額は時価と一致している。法人税の実効税率は40%で税効果会計を適用する。

S社貸借対照表			
平成×5年3月31日			
諸資産	2,000	諸負債	700
土地	500	資本金	1,300
		利益剰余金	500
	<u>2,500</u>		<u>2,500</u>

S社貸借対照表			
平成×6年3月31日			
諸資産	2,500	諸負債	900
土地	500	資本金	1,300
		利益剰余金	800
	<u>3,000</u>		<u>3,000</u>

当期のP社とS社の個別財務諸表は次のとおりである。

P社貸借対照表			
平成×7年3月31日			
諸資産	5,000	諸負債	3,500
土地	2,000	資本金	4,500
S社株式	3,084	利益剰余金	2,084
	<u>10,084</u>		<u>10,084</u>

S社貸借対照表			
平成×7年3月31日			
諸資産	2,800	諸負債	900
土地	500	資本金	1,300
		利益剰余金	1,100
	<u>3,300</u>		<u>3,300</u>

P社損益計算書	
自平成×6年4月1日 至平成×7年3月31日	
諸収益	2,500
諸費用	1,500
当期純利益	1,000

S社損益計算書	
自平成×6年4月1日 至平成×7年3月31日	
諸収益	900
諸費用	600
当期純利益	300

- P社、S社ともに決算日は3月31日である。
- のれんは発生年度の翌年から20年間で毎年定額を償却する。





- ①まずP/L作成
- ②S/S (P社の期首は期末  $2,084 - \text{当期利益 } 1,000 = 1,084$ )  
連結の期首は  $1,084 + 800 - \text{開始仕訳 } 635 = 1,249$
- ③最後にB/S作成